

々の授業の中では、かなり行われていて、それが、学習指導や社会的事象に対する「関心・態度」の評価に有効なフィードバックを可能にしているからである。「今日の授業では、なんとなく定着が悪かった」ということがあるものである。それは、テストやアンケートという形をとらなくてもわかるものであり、意図的に「評価をするのだ」と身構えなくとも、日々の授業の中で自然におこなわれているものである。

授業後、指導者は、このデータ処理の結果を待たず、治療計画を持った。次の時間の指導計画の改善である。次の時間のはじめの部分に、「鉄の生産工程の理解の定着を図るためのVTRの視聴」を位置づけたのである。

ここにおいては、次のようなことをまとめることができる。

・学級全体の、授業に対する「関心・態度」の評価を適宜おこなうようにし、必要に応じてフィードバックすることが大事であること

ウ 子ども一人一人の、授業に対する「関心・態度」の評価

「検証授業Ⅱ」における子どもたち一人一人の、授業そのものに対する「関心・態度」は、

ア よそうをたてたところ と

イ カードをならべたところ では、下の図に示すようになっている。

この図は、前述の「学級全体の、授業に対する関心・態度」のデータを個人ごとに整理したものであるが、この場合には、子ども一人一人が、授業の中でどう「関心」を変えていったかをとらえることができる。2, 3, 12, 27, 36の5名が、授業に対する関心を高めているだけで、学級の子どもの60%弱が「すすんでできない」方向に変わっていることがわかる。ここで特に注目したいのは、△に矢印がついていない子ども、つまり、よその段階でつまづいていて、追究の段階でもなお、あまりすすんでできなかったという子どもである。評価を学習指導に生かすということは、このような子どもに、個別的、具体的にフィードバックを行うということなのである。これとは逆に、たとえば、12番の子どものように、著しくその授業に対する関心を高めている者について、その要因が何であるかをさぐることも、学習指導に評価を生かそうとするときに留意したいことである。

授業そのものに対する「関心・態度」の評価と「社会的事象に対する関心・態度」のかかりについては、まだ明らかにとらえきれないことが多いが、現在、次のようなことがいえる。

・授業そのものに対する「関心・態度」の評価を適切におこない、それを学習指導に生かしていくことは、認知的な側面の学習を確かにするだけでなく、間接的に「社会的事象に対する関心・態度」を高めることになるということ。

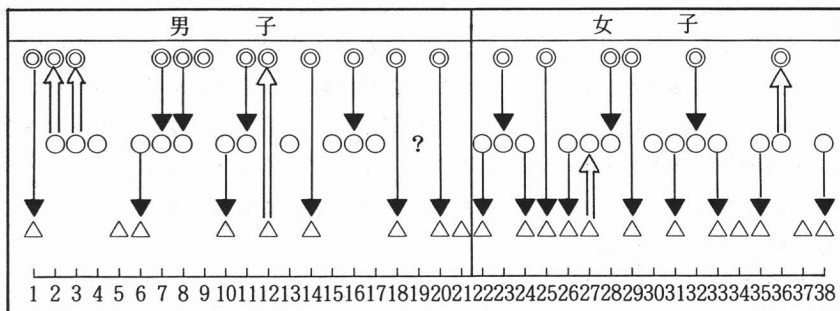


図12 授業に対する「関心・態度」の変化（個人）